

中国史の中の「病氣」と戦争、信仰

菊池秀明

2020年に感染が広がったCOVID-19は現在も終息しておらず、私たちは常に「人間は病氣とどう向きあうか」という問いを抱えながら生きている。こうした状況下で、研究者である大学教員は授業の場で学生たちに何を語り、何を共に考えるべきなのかが問われている。

本稿は感染の拡大によってキャンパスが閉鎖され、オンライン授業が始まった2020年春に行った歴史学メジャーの授業「歴史学研究方法」で、教材として使用したテキストである。この年授業を担当した那須敬先生と筆者が立てたテーマは「歴史のなかの病氣」であった。そして筆者は学生たちにどのように問いを立て、研究を進めるかを考えてもらう題材としてこの小論を執筆した。

当時は学内外の図書館が利用できず、執筆時間も限られていたため、先学の研究成果から史料を転引させていただくなど、今日の眼から見て不満な点は少なくない。ただ当時この小論を通じて学生に伝えようとした内容は、その後の授業および研究活動に活かされたと考えている。

コロナ下での授業実践についてはすでに多くの分野で成果が出されていると聞く。以下では「歴史のなかの病氣」を題材とした取り組みの一例として、当時の姿をなるべく残しながら紹介させていただくことにしたい。

はじめに

中国史の中の「病氣」というタイトルからまず連想されるのは、中国の伝統医学である中国医学（中医）であろう。これは全身を見て診断を行い、人間の身心が持っている治癒能力を高めることを主眼とする点で西洋近代医学とは異なる。また中国医学は生薬、鍼灸、気功に分かれ、日本に伝えられて独自の発展（漢方）を遂げた。

医療に関する知識は書籍にまとめられ、16世紀に出版された『本草綱目』（本草学（薬学）の基本文献）は大きな影響力を持った。中国の歴代王朝の中には公立の薬局を設けた例もあるが、基本的に民生には関与しなかった。代わって医療や病人の介護を担ったのは民間の医者、地域社会のリーダーだった読書人（儒教的知識人）の作った善堂などの慈善団体だった。

いっぽう病氣に苦しむ人々の不安や悩みに応えたのはシャーマニズム（扶鸞）と宗教結社だった。それらの中には神々のお告げを記録し、人々に善行を勧める『善書』として刊行する組織も多かった。

近現代の中国では植民地となった開港地や大都市で西洋近代医療が移植された。いっぽう国内の大部分を占める地方都市や農村は、くり返し戦乱と疫病の流行に見舞われた。動乱の

中で人々はどのように「病氣」と向き合ったのか。本報告では 19 世紀半ばに発生した太平天国とその後の慈善団体を中心に検討したい。

【1】上帝会にみる病とシャーマン

太平天国は上帝会と呼ばれる新興宗教を母体とした。その指導者洪秀全（後の天王）はプロテスタントを受容し、これと中国の伝統文化を融合させて太古の中国に存在した（筈の）上帝ヤハウエに対する信仰に立ち戻ることを主張した。

ここで興味深いのは、科挙に挫折して病氣に倒れた洪秀全が「幻夢」の中で天上の「老人」¹⁾からこの世を救う使命を与えられた、と考えた事実である。当時中国では死者が天上で閻魔と会い、その命を受けて蘇生したという話が語られており、病氣と「死」は異界と交信する機会と考えられていたことがわかる。

上帝会は中国の辺境地域で貧困に苦しんでいた客家などの下層移民に広まった。その教典の一つ『天条書』は病氣の時に行う祈祷文を収めている。

わたくし〇〇は現在病難に遭っています。天父皇上帝のお恵みと加護により、病難が速やかに退き、健康な身体に戻れますように切にお願いいたします。もしさらに妖魔が侵害したならば、天父皇上帝が大いなる天威を示されて、妖魔を厳しく撃滅して下さるよう切に祈ります。

救世主である天兄耶穌が私どもの罪をあがなって下さった功労におすがりして、天父皇上帝が天で行っておられる聖旨を、この世でも天と同じように行って下さるようお願いいたします。わたくしの願いをお聞きとどけ下さるよう、真心から伏してお願いいたします²⁾。

ここで病氣は「妖魔」即ち一神教だった上帝教が排撃した既存の神々がもたらすものと考えられていた。この「妖魔の頭」はサタン（撒旦）であり、閻羅妖あるいは蛇魔、東海竜妖とも呼ばれた。蛇（竜）は創世記で人間を罪に誘惑した存在であり、ある信者は「上帝を拝まなければ蛇や虎に襲われる」³⁾と教えられたと供述している。また死ぬことは「昇天」と呼ばれ、喜ぶべきこととされた。祈祷文は天兄キリストが人々の罪を贖ったと述べているが、この時の罪とはキリスト教の原罪とは異なり、妖魔（蛇）が人々にもたらしたと考える性善説の立場を取っていたことが窺われる。

上帝会は各地の廟の神像を「妖魔」と見なして排撃する偶像破壊運動を行った。そして廟信仰を主催していた有力者との軋轢を強め、洪秀全に次ぐリーダーだった馮雲山（後の南王）が拘束された。この時天父皇上帝が降臨したとしてお告げを発し始めたシャーマンが楊秀清（後の東王）であった。

この地のシャーマニズムは降童と呼ばれ、南方シャーマニズムの部類に属する。シャーマ

ンの多くは下層の出身で、中級の神々を降臨させ、病気の処方箋などを伝えたが、降臨が終われば人々の尊敬を集めることはなかった。

だが上帝会で行われた天父下凡は唯一神であるヤハウエが降臨する点で通常のシャーマニズムと異なっていた。また楊秀清は「口はきけず、耳は聞こえず」「耳からは膿が流れ、眼からも絶えず涙が流れ出た」という異常な病気に冒された。だが彼はこの病気の結果、「病をなおす能力」があると考えられた。「楊秀清は自ら進んで他人の病気を引き受けようと祈り、しばらくの間その苦しみをこらえ、かくて他人の病気を身に贖い、その後人に代わって引き受けた病気から逃れた」⁴⁾と見なされたのである。

このようにハンディキャップのある人間が人々の苦難をあがなうという発想は、中国の民間宗教に広く見られる現象だった。日本の一向一揆でも「平家語り」と呼ばれる盲目の琵琶法師が信者集団の中核となって大きな役割を演じたという。上帝会の場合、罪とはまず偶像を崇拝することであり、これを犯した者は容赦なく処罰された。人間が内面にかかえる罪を想定していない分、上帝会はキリスト教よりもアジアの土着宗教としての特質が強く見られたと考えられる。

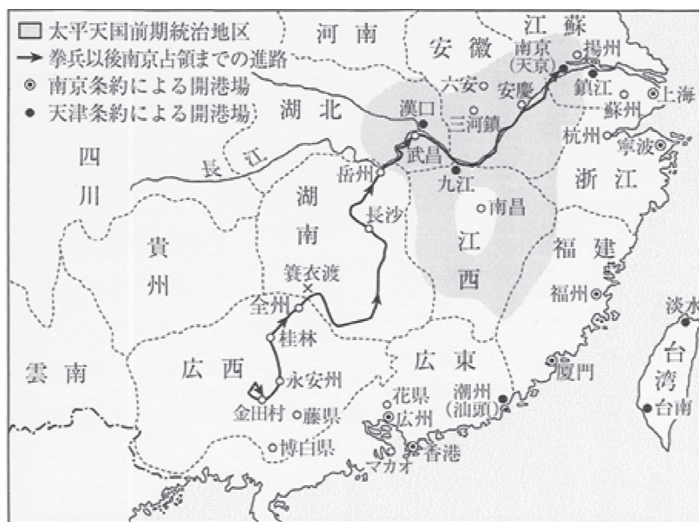


図1 太平天国期の中国南部

【2】太平天国における医療

1850年末に上帝会は「上帝のもとでの一大家族」を実現するべく、偶像崇拝者と見なされた清朝皇帝の打倒を唱えて武装蜂起した。太平天国を名乗った彼らは2万人の会衆を男女別々の軍事組織に編入し、約束された「小天堂（地上の天国）」へ向かって清軍と戦闘をくり広げた。

太平天国の軍隊である太平軍は、「左足を民家の門にふみ入れた者はすぐに左足を切った」⁵⁾という厳しい軍規を持っていたことで知られる。1855年に出版された『行軍総要』の

「愛惜の号令」は次のように述べている。

およそ将官たる者は、兵士を愛惜することを知らねばならない。途中でたまたま負傷したり、老人や子供で山を越え、川を渡ることが出来ない者がいれば、必ず将校に命令して誰の馬であろうと牽いてきて、これらの能人（障害ある者）に与えて座らせるべきである。もし馬が足りなければ、兵士に命じて担いで行かせ、決して置き去りにしてはならない。

陣地を構える時には、必ず拯急（救急）の官員に命じて、全ての能人について、礼拝ごとに傷の癒えた者が何名、未だ癒えない者が何名かを逐一報告させよ。また宰夫（屠殺係）に命じて、三日ないし二日に一人ずつ肉を支給して療養に役立たせよ。さらに掌医、内医（部隊内の外科、内科医）に特に注意して治療させ、新鮮な薬を選んで、負傷者が膿や血の臭いで不快な思いをすることがあってはならない。

その将官たる者は公務がやや暇な時には、必ずみずから功臣衙（軍中で薬剤を扱った部署）を視察し、その親族の住む場所の遠近を配慮し、呼び寄せて世話をさせよ。親族のいない者は隊内の兄弟が注意深く世話し、同じく魂父（上帝）が生んだことを念じて骨肉のように扱うべきである⁶⁾。

史料はまず負傷者や体力のない老人、子供が落伍することのないよう配慮を命じているが、これは上帝会員が家族ぐるみで蜂起に参加したことと関連していた。洪秀全は病人、負傷者を保護して「共に小天堂の威風を見る」べきであり、彼らが守られなければ「天父天兄に辱めが及ぶ」⁷⁾と述べている。弱者への医療は彼らが約束した救済の宗教的理念を実現するために不可欠な措置だった。

また史料は負傷者の症状を常に把握し、栄養を与えて医師の治療を施すように命じている。太平天国では通常肉（犬肉が重んじられた）が支給されるのは上級将校までとされており、負傷者に肉を食べさせるのは特例だった。また医者は一ヶ軍（規定では 12,500 人）ごとに外科医が 25 名、内科医が 14 名置かれ、彼らは上級将校と同じ扱いを受けた。

太平天国が南京を占領すると、南京市内には街ごとに医者が置かれた。清朝側の記録にも「賊は將兵が病気になる」と、熱心に医治に勤め、絶えず薬を与えて……、軍心を結ぼうとした⁸⁾とある。医者を新たに招くことも熱心に行われ、1854 年には眼科、婦人科、小児科の医師を広く求める布告が出された⁹⁾。獣医もあり、主に軍馬の治療にあたった。薬は城内の薬店から没収した薬材を総薬庫に集め、医官の監督のもと薬店の従業員がこれを処方した¹⁰⁾。また外地にいる部隊に薬屋での略奪を禁止し、薬材の流通を確保しようとした¹¹⁾。

1854 年に南京を訪問した宣教師ブリッジマンによると、太平天国政府は種痘 (vaccination) を行う布告を出していた¹²⁾。また 1859 年に香港から南京へ入った洪仁玕（洪秀全のいとこ、干王）は「医院を興して、病苦を救う」ことを求めた。彼は「善を好み、天父天兄の聖

なるみ心を体した富貴の者で、善を好む者が寄付を募ってこの事業を行う」¹³⁾ことを提案し、南京で翻訳官をつとめた宣教師ロバーツの住宅裏に診療所が置かれたという¹⁴⁾。それらは植民地統治で模索された近代的な医療政策をいち早く移植する試みだったと言えるかも知れない。

【3】広がる戦火と疫病

このように太平天国は自分たちの宗教理念に基づいて軍あるいは公権力としての医療体制を創りだそうとしたが、実際の運用は決してうまく行かなかった。

1854年に太平天国が眼科の医師を招いたのは、眼に病気を抱えた楊秀清の治療のためであり、病状の改善に効果をあげた「国医」の李国瑋（元薬剂商）は補天侯に昇進した¹⁵⁾。だがこうした医療の恩恵は一般の将兵や新たに太平天国に参加した「新兄弟（新兵）」「外小（一般民衆）」には届かなかった。南京で太平天国に参加した汪士鐸は、楊秀清の東王府で文書係などをしていた長女がマラリアに罹ったが保護を得られず、次女を頼ったものの病死したと述べている¹⁶⁾。

戦場の状況はさらに苛酷だった。1853年に太平天国は2万名の北京攻略軍を派遣し、北伐軍は北京から100キロ程の天津郊外で越冬しながら援軍を待った。この時軽装だった北伐軍兵士は夜間の行軍で多くが凍傷にかかったが、残り火を踏んで足を温めるか投棄、患部の切断以外に治療方法がなかった。やがて雪解けの泥の中で再び行軍が始まったが、多くの兵は泥に足を取られて身動きが取れなくなり、助けを求めたところを上官や追撃して来た清軍兵士に殺された。

1854年に北伐軍は大運河沿いの連鎮で清軍に包囲された。北伐軍に参加した陳思伯の回想によると、医学の知識があった彼は負傷兵の介護に当たった。清軍の砲撃によって多くの兵が犠牲となり、負傷した者は誰一人助からなかった。傷口の腐爛臭が鼻を突いたが、彼は兵の苦しみ声を聞くに忍びず、夢中で治療するうちに砲撃にも動じなくなったという¹⁷⁾。その後山東で最後まで抵抗した部隊も清軍の水攻めによって飲料水がなくなり、糞尿の混じった泥水を飲んだために多くの兵が疫病にかかって死んだ¹⁸⁾。結局北伐軍は1855年に壊滅した。

太平天国の主戦場であった長江流域でも、負傷兵に対する医療が追いつかず、飢餓が重なって疫病の流行を招く事態は頻発した。とくに1860年以後に忠王李秀成の軍が進出した江蘇東部の蘇州、浙江の杭州一帯では、戦場を追いかけるように疫病の流行地域が広がった。また直接戦火が及ばなくても、避難民が集中した地域では疫病の被害が深刻だった。1856年に南京を包囲していた欽差大臣向荣の江南大営が太平軍の攻撃で崩壊した後のこととして次のような記載がある。

向荣の陣地が丹陽に退くと、上流の難民が紛々として南下した。わが県（無錫）の善

き士が資金を集め、北塘の放生池で一人錢三十文ずつ与えたところ、十日間で錢五百余千文を支給したが、寄付金が足りなくなって中止した。また麺や餅を一人二枚ずつ与えた者もいたが、半月で終わった。

ついで無錫と金壇県で難民三千人を収容することになり、四つの寺廟に住ませたが、たまたま旱魃と酷暑に見舞われたため、臭いと穢れは堪えられない程だった。疫病が発生し、急ぎ医者に治療させたが、伝染が広がって、死者は大変多かった¹⁹⁾。

戦乱によって大量の避難民が押しかけ、地元のエリートが彼らを救済しようとしたが焼け石に水だったこと、収容施設で疫病が流行して大量の死者が出たことがわかる。疫病の流行は1862年と63年にピークを迎え、ペストとマラリアが猛威をふるった²⁰⁾。残された富裕層の日記を見ても、家族や親戚の中で病死した者の比率は2割から5割近くにのぼったという²¹⁾。

疫病の猛威は開港地として急速に発展しつつあった上海も襲った。1862年に江戸幕府の使節団が上海を訪問し、随員の中には高杉晋作、五代友厚の姿もあった。彼らは難民があふれ、ヨーロッパ諸国の支配を受けている上海の姿にショックを受けた。また太平天国のキリスト教的性格に期待を寄せていた宣教師たちも、社会の混乱を前に「現在の彼ら（太平天国）の運動は破壊でしかなく」「王朝の交代が必要であるとは認められない」²²⁾と述べて太平天国と距離を置いた。

1862年5月に曾国藩の率いる湘軍は南京城下に迫り、南京攻防戦が始まった。この年9月に湘軍陣地で疫病が発生し、「陣中で病気の者が一万人を越えた」²³⁾とあるように戦力が低下した。これを見た太平軍は総攻撃をかけたが、補給が続かずに作戦は失敗した。この間南京の人々も飢えと病気に苦しんだが、洪秀全は城内の雑草を指して「甜露（マナ）を食え。さすれば長生きできる」²⁴⁾と答えたただけだった。やむなく李秀成は城門を開いて10万人以上を脱出させたという。

1864年5月に洪秀全は病に倒れた。だが彼は服薬を拒否し、「朕はこれから天堂に昇り、天父天兄から天兵百万千万を受け取って戦い降り、大いに権能をあらわして天京を守る」²⁵⁾という最後の詔を出して死んだ。その1ヶ月後に南京は陥落し、上帝信仰によって人々の救済をめざした太平天国は滅亡した。その死者は少なく見積もっても2,000万人と言われている。

【4】慈善団体の救済思想と遺体収拾、埋葬活動

このように宗教結社から出発した太平天国は、一つの公権力として病気や戦乱から人々を救うことは出来なかった。19世紀末になると香港や上海などの租界で植民地当局と中国人エリートによる近代的な医療制度が創られた。それは上海のような都市において公衆衛生という「公共性」を生み出したと言われる。

いっぽう病気や災害に苦しむ人々の心に救済の手を差し伸べたのは宗教結社を基礎とする慈善団体だった。これらの組織は戦乱や疫病の多発した当時の社会を「末劫」の世と捉え、扶鸞（神降ろし）による乩示（神託）と道德の実践（修行と慈善活動）によってこそ破局を免れることが出来ると主張した。小武海櫻子氏の研究によれば、その一つ同善社の布教書である『洞冥宝記』は、20世紀初めの戦乱と災害の原因を「新文化」に求め、次のように述べている。

はからずもこの年（1900年）の春夏の節目に、山東一帯で紅燈邪教徒が争いを始め、国際交渉をもたらし、八カ国の西洋人が北京へ進攻した。天子は流浪し、巨額の賠償を払った。およそこの年北京近郊、直隸、山東、山西一帯の官吏軍民で兵乱、水害、火災、戦禍、疫病によって亡くなった者は数十万を下らない。各省で水害、火災、地震、雹といった災難に遭った者は計り知れない。まことに大きな災害である。

八年を経て戊申（1908年）に清太后（西太后）、皇上（光緒帝）が三日のうちに崩御した。宣統三年辛亥（1911年）八月に至ると武昌で革命軍が蜂起し、清王朝は改まり、民国が起こったことはさらに一大変動であった。

丙辰（1916年）、丁巳（1917年）に至ると、北京近郊、直隸、湖南、広東で大水害が起き、住居や穀物の苗が流され、餓死や溺死する民は甚だしく多い。戊午（1918年）の冬に至ると、二二省にみな疫病が流行り、死者はただ数百万の生霊だけではない。南北の不和を加え、連年の戦争はやまず、銃創弾雨でなくなる民は数えようもない。

その原因を尋ねると、総じて人心が大いに壊れ、道德が墮落し、国に統一した秩序がなく、軍隊は崩れ乱れ、平権が尊ばれ、自由が優れているとされ、その結果種々の惨劫が起こるのである。哀れなるかな、わが人民よ、どうしてこの事に堪えられようか²⁶⁾。

ここで史料は義和団戦争後の混乱が列強による中国侵略の結果であり、その直接的な原因を伝統的な道德の崩壊と「平権」「自由」を尊ぶ西洋近代文明に求めている。当時中国ではデモクラシーとサイエンスを標榜する新文化運動が知識人を中心に提唱され、中国古来の儒教、民間宗教だけでなくキリスト教も攻撃の対象になっていた²⁷⁾。彼らが批判したのはこうした近代主義的な風潮であり、「世間の者は洋毒にあたり、上っ面を学び、文明と自由平等を高らかに談じる者はみな五倫を滅ぼし八徳に背いている」²⁸⁾と指弾している。

同善社のメンバーには日本留学の経験者もあり、必ずしも排外主義者と見なすことは出来ない。むしろ彼らは第一次世界大戦による戦乱と疫病の広がりを終息させるためには、世界の宗教を中国民間宗教の神である無生老母や孔子を中心に統一し、「武器を造らず、人道を講じ」「戦争を収束させ、共に和平を講じる」²⁹⁾ が必要であると考えていた。それは中国の伝統的な「大同」ユートピアを軸にすえたナショナリズムと普遍主義の融合と見ることが可能だろう。

こうした中国の慈善団体で最も有名なのが世界紅卍字会であった。孫江氏の研究によれば、世界紅卍字会は 1916 年に山東で成立した新興の宗教団体で、その理念は党派や政治を超えた修行と慈善活動を行うことにあった。1922 年に北京政府に「社会团体」として公認された紅卍字会は中国各地および海外で慈善活動を展開したが、なかでも 1937 年末の日本軍による「南京大虐殺」後に行った被害者の救護活動や遺体収拾、埋葬事業はよく知られている³⁰⁾。

遺体の収拾と埋葬は疫病の流行を防ぐために重要であったが、日中戦争の最中に両軍の通行証を得ることは難しく、日本軍の爆撃で負傷者を出すなど危険を伴う作業だった。また紅卍字会が収拾対象とした遺体には日本兵も含まれていた。日本兵の遺体収拾を紅卍字会に依頼したのは大本教の出口王仁三郎らで、紅卍字会と大本教は関東大震災後の救済活動で提携関係を結んでいた³¹⁾。

紅卍字会の南京での救護活動は大きな成果をあげ、埋葬した犠牲者の遺体は 43,071 具にのぼった。また紅卍字会の南京分会会長で日本留学経験を持つ陶晋保は日本軍が作った南京市自治委員会の会長に任命された（病気を理由に執務はしなかった）。日本敗戦後に陶晋保は「漢奸（民族の裏切り者）」として捕らえられ、「敵国に通謀し、本国への反抗を図った」罪で 2 年間の禁固刑を受けた。失意のなか陶晋保は刑期満了直後の 1948 年に脳溢血で死亡した。彼は宗教的活動の普遍性に対する周囲の無理解ゆえに排除されたのである。彼の遺族は台湾へ移った国民党政府に対し、名誉回復を求めて長い活動を続けたという³²⁾。

おわりに

本稿は中国史の中の「病氣」について、近代の新興宗教とその運動を手がかりに考察した。病氣は人々にとって忌むべきものだったが、病氣による死と蘇生は天界と交信し、召命をうける機会と見なされていた。また病氣による身体的なハンディキャップは「異人」の証しとされ、人々の苦難を贖う能力があると考えられた。上帝信仰の回復をめざして新王朝の創設を試みた太平天国は、救済の約束は成就されなければならないという宗教的信念に基づいて軍と住民組織において医療制度の充実を図った。歴代の王朝政府が民生や医療に殆ど関心を持たなかったことを考えれば、それは一つの快挙であったと言えるだろう。

だが太平天国の医療制度は様々な制約により、運用面で効果をあげることは出来なかった。むしろ清軍や湘軍との絶え間ない戦争の中、戦病死する将兵の数は増えた。また疫病が流行し、戦場あるいは避難民が集中した地域は深刻な被害を受けた。それは一つの専制あるいは権威主義的な体制が住民の犠牲を伴わずに病氣を防ぐことは出来ないという事実を改めて我々に伝えている。

太平天国の滅亡後、上海や香港などの都市では植民地支配の経験に基づき近代的な医療制度が整えられた。ヨーロッパ近代文明の影響を受けた中国人エリートもこの動きに参画し、公衆衛生を通じて一つの「公共性」が模索された。いっぽう国内の大部分を占める地方都市

と農村部では、民間宗教の流れを引く慈善団体が神々の啓示に基づく実践として医療活動に取り組んだ。その担い手たちは西洋優位の近代主義的「文明」観を批判し、中国固有の「大同」思想に基づく宗教の統一によってこそ、世界平和を構築出来ると主張した。

こうした傾向は近代文明の受容を西洋化ではなく、中国古来の理想を実現するための方途と考えた中国の近代化事業に共通して見られる特徴だった。19世紀末の中国を形容する言葉として「東洋の病人」があるが、当時中国が苦しんでいた「病氣」とは自分たちを唯一の正しい基準と見なし、これと異なる他者を「野蛮」として排斥、淘汰した「近代」という病氣だったと言えるかも知れない。

日中戦争が始まると、慈善団体の一つであった紅卍字会は南京大虐殺の犠牲者の遺体収拾と埋葬を行った。また彼らは交流のあった大本教の依頼を受け、日本兵の遺体収拾にも取り組んだ。戦争という極限状況の中で、こうした活動を可能にしたのは彼らの宗教的信念に外ならなかったが、それは国益を重視する排他的な国家主義からは容認されなかった。その結果、事件後の南京で自治委員会の会長となった陶晋保は「漢奸」として処罰されたのである。

最後にもう一つ、医療従事者にまつわるエピソードを紹介したい。日中戦争中の日本は台湾の医師を中国大陸に派遣し、「同仁会」による医療宣撫工作を行った事実はローミンチェンの著書によって知られるが³³⁾、敗戦時に大陸にいた日本人医師と看護師の多くはその後勃発した国共内戦で解放軍（共産党軍）に加わって医療活動にあたった。これを「留用」日本人という。

日本人の「留用」政策は当時専門技術のある人材が不足していた中国共産党の要請によって行われたもので、医療関係者だけでなく軍関係者や南満州鉄道の技術者、満映の映画製作者など多岐に及んだ。彼らは中華人民共和国の建国に尽力し、1950年代に日本に帰国したが、冷戦体制下にあった日本社会は彼らを社会主義のシンパと見なして排斥した³⁴⁾。狭隘な保護主義を乗り越えて弱者に寄り添い、医療従事者の苦難に思いをいたす病氣との向き合い方は、現代の私たちに問われている歴史の課題なのだと言えよう。

註

- 1) ハンバーグ、T.『洪秀全の幻想』（青木富太郎訳、生活社、1940年、23頁）。この老人は金髪に黒服姿で、中国の神である閻魔に近かった。だが1843年にプロテスタントの伝道パンフレット『勸世良言』を読んだ洪秀全は、この老人がキリスト教の神ヤハウェであったに違いないと確信した。これは宣教師がヤハウェの訳語として中国の古典から「上帝」を借用した結果で、ここから洪秀全は太古の中国ではキリスト教が信仰されていたのであり、いまこそ中国は上帝信仰に立ち戻らなければならないと主張した。
- 2) 『天条書』（並木頼寿編『新編原典中国近代思想史 1 開国と社会変容』、岩波書店、2010年、170頁）。
- 3) 「李秀成の供述書」（前掲、『新編原典中国近代思想史』1、217頁）。

- 4) ハンバーク、前掲書、117 頁。
- 5) 「李秀成の供述書」(前掲、『新編原典中国近代思想史』1、217 頁)。
- 6) 『行軍総要』体借号令(中国史学会編・中国近代史資料叢刊『太平天国』2、神州国光社、1952 年、428 頁)。
- 7) 「行営舖排詔」(太平天国歴史博物館編『太平天国文書彙編』中華書局、1981 年、31 頁)。
- 8) 『賊情彙纂』巻3、偽官制、偽朝内官(中国史学会編・中国近代史資料叢刊『太平天国』3、神州国光社、1952 年、105 頁)。
- 9) 北王韋昌輝招延良医誠諭、太平天国甲寅四年四月初七日(前掲、『太平天国文書彙編』、113 頁)。
- 10) 蘇浮道人『金陵雜記』(中国史学会編・中国近代史資料叢刊『太平天国』4、神州国光社、1952 年、621・616 頁)。
- 11) 『太平条規』行営規矩(前掲、『太平天国』1、156 頁)。こちらは 1852 年の刊行で、蜂起当初の比較的簡略な行軍に関する取り決めが収められている。
- 12) A Letter by Rev.E. C. Bridgman, North China Herald, 22 July 1854, Prescott Clarke and JS Gregory, *Western Report on the Taiping*, Canberra: Australian National University Press, 1982, p. 150.
- 13) 洪仁玕『資政新篇』(前掲、『太平天国』2、535 頁)。
- 14) 羅爾綱『太平天国史』志第十六、医療衛生(中華書局、1991 年、1,438 頁)。同書によると、1861 年に南京を訪問したイギリス人がこれを目撃したとあるが、出典となる『吳煦檔案』は公開されておらず、筆者は未見。広東で洪秀全と接触のあったロバーツは広州の租界外に教会堂を建てており、南京でもある程度の診察をしていたと推測される。
- 15) 謝介鶴『金陵癸甲紀事略』(前掲、『太平天国』4、671 頁)。
- 16) 汪士鐸「乙丙日記」(前掲、『新編原典中国近代思想史』1、260 頁)。
- 17) 陳思伯『復生録』(羅爾綱、王慶成主編『中国近代史資料叢編続編・太平天国』4、広西師範大学出版社、2003 年、348-350 頁)。
- 18) 張集馨『道咸宦海見聞録』中華書局、1981 年、162 頁。
- 19) 『平賊紀略』咸豐六年、難民過境(太平天国歴史博物館編『太平天国史料叢編簡輯』一、中華書局、1961 年、235 頁)。
- 20) 余新忠「咸同之際江南瘟疫探略—兼談戦争与瘟疫之関係」『近代史研究』2002 年 5 期。
- 21) 侯竹青『太平天国戦争時期江蘇人口損失研究(1853-1864)』中国社会科学出版社、2016 年、257 頁。
- 22) Memorandum by the Muirhead, Papers relating to the rebellion in China and trade in Yang-zhe-Kiang River, London, 1862, pp. 21-22. また倉田明子『中国近代開港場とキリスト教—洪仁玕がみた「洋」社会』(東京大学出版会、2014 年、241 頁)を参照のこと。
- 23) 曾国藩奏、同治元年八月二十九日(『曾国藩全集』奏稿4、岳麓書社、1980 年、2,599 頁)。
- 24) 「李秀成の供述書」(前掲、『新編原典中国近代思想史』1、237 頁)。
- 25) 沈懋良『江南春夢庵筆記』(『太平天国』4、445 頁)。
- 26) 『洞冥宝記』二回(小武海櫻子「民間教派から慈善団体へ—『洞冥宝記』の災害観にみる同善社の救世思想」、武内房司編『戦争・災害と近代東アジアの民衆宗教』有志舎、2014 年、72 頁より転引)。
- 27) 石川禎浩「1920 年代中国における「信仰」のゆくえ—1922 年の反キリスト教運動の意味するもの」(狭間直樹編『1920 年代の中国』汲古書院、1995 年、67 頁)。ここで石川氏は中国の反キリスト教運動が既存の宗教を否定してマルクス主義的な「科学的社会主義」をうち立て、青年が

国民革命に投じていく新たな「信仰」の創出だったと指摘している。

- 28) 『洞冥宝記』一六回（小武海、前掲論文、74 頁より転引）。
- 29) 『洞冥宝記』三七回（同上、76 頁より転引）。
- 30) 孫江「戦場の遺体―「上海事変」における紅卍字会の遺体埋葬活動と大本教」（武内房司編、前掲書、180 頁）。
- 31) 孫江『近代中国の宗教・結社と権力』汲古書院、2012 年、133 頁。
- 32) 孫江「記憶の耐えられない重さ―陶保晋と彼の子孫にとっての南京」（『中国の「近代」を問う』汲古選書 71、汲古書院、2014 年）。
- 33) ローミンチェン『医師の社会史―植民地台湾の近代と民族』（塚原東吾訳、法政大学出版局、2014 年、215 頁）。なお原著のタイトルは **Doctors Within Borders** で、「国境なき医師団」の存在を意識してつけられている。
- 34) NHK「留用された日本人」取材班『留用された日本人―私たちは中国建国を支えた NHK スペシャルセレクション』日本放送出版協会、2003 年。鹿錫俊「東北解放軍医療隊で活躍した日本人―ある軍病院の軌跡から」（島根県立大学北東アジア地域研究センター『北東アジア研究』6、2003 年）。